



源氏物語とは

げんじものがたり

源氏物語は平安時代中期、夫に先

立たれた紫式部が平安京の外れ（現
ろざんじ
在の蘆山寺周辺）で書き始めた全五
じょう
十四帖に及ぶ長編小説です。この物
語の評判を聞いた藤原道長は、娘の
きさき
彰子（一条天皇の后）の女官として、
紫式部を宮仕えさせました。宮仕え
をするようになった紫式部は、道長の
支援もあり、源氏物語を完成させた
とされています。

物語の主人公は、天皇の皇子である
ひかるげんじ
光源氏。この光源氏が、様々な女性
と恋に落ちる物語です。では、源氏
物語に描かれた光源氏と女性たち
の華やかな世界は、実際どのような
ものだったのでしょうか？ 今回

は源氏物語の第六帖を取り上げ、平
安貴族たちの暮らしを、平安京や
離宮で出土した遺物とともに紹介
します。

ねずみの「ちゅう源氏」と一緒に、
源氏物語のリアルな世界を見てみ
ましょう！

第六帖 末摘花

第三段 新春正月十六日の夜に
姫君の琴を聴く

すえつむはな

末摘花は光源氏史上、最も印象
に残る女性の一人だったのではな
いでしょうか。かわいらしく慎まし
い女性を探していた光源氏は、あ
る時、とても内気で琴が一番の友
達だという末摘花の噂を聞きます



写真1 鳥羽離宮跡出土の和琴

（イメージ1）。末摘花のことが気にな
った光源氏、月の美しい夜に末摘
花の屋敷を訪ね、こう話しかけます。

「御琴の音、いかにまさはら
むと、思ひたまへらるる夜のけし
きに、誘はれはべりてなむ。…」
（琴の音がとても美しいと思える
夜の気配に誘われて参りました。）



イメージ1 琴を弾く末摘花

この日は末摘花の琴の音を聞くだけで、光源氏は立ち去りました。

さて、平安時代の琴には、琴柱のない七弦の「琴」、琴柱を用いる六弦の和琴「大和琴」「東琴」、十三弦の「箏」(現代のいわゆる琴)がありました。

末摘花が弾くのは、七弦の琴で、光源氏も得意でした。光源氏はその他、和琴も嗜んでいました(第五帖「若紫」より)。写真1は、鳥羽離宮跡で出土した和琴です。弦を張るための穴が6つ空いています。

第五段 秋八月二十日過ぎ常陸宮の姫君と逢う

そして時は過ぎ、秋。しばしば末摘花に手紙を出しても返事がなかったため、しびれを切らせた光源氏は、ついに末摘花の屋敷に出向きます。

その時の光源氏の姿は、「いと尽きせぬ御さまを、うち忍び用意したまへる御けはひ、いみじうなめきて、…」(この上ないお姿を、お忍びで準備なさったご様子は、とても艶やかで美しい)と描かれています。

平安時代の貴族たちは、化粧をし、鮮やかに重ねた衣に香を薫きしめ、長く伸ばした髪を櫛で梳くなど、とてもおしゃれに気を配っていました。

実際の出土品をみてみましょう。写真2は、平安京右京三条三坊十町跡で検出したお墓に納められていた



イメージ2 鏡を見ながら眉を整えるちゅう源氏

化粧道具です。漆塗りの盆の上に、漆器の合子と皿、ツゲ製の串状木製品、玉、毛抜き、唐墨が置いてありました(写真3)。この合子の中には白粉とみられるものが入っていました。また、銅鏡も出土しています(写真4)。

平安時代の化粧は、顔に白粉を塗り、頬と唇に紅をさし、眉毛を抜いて黛で眉を引いていました。もちろん、綺麗になってゆく自分の姿を確認するため、目の前には鏡台に掛けた鏡を置いていたことでしょう(イメージ2)。平安時代末期になると公家の男性も女性と同じような化粧をしていたと

されます。源氏物語の記された平安時代中期でも、男性が白粉を塗っていたことが『枕草子』から分かります。また源氏物語にも、「化粧じたまふ」光源氏の姿が記されています(第二十三帖「初音」より)。

誰もが振り向く光る君とはいえ、気になる異性に初めて会う際には丹念に準備をしたことでしょう。光源氏が、末摘花の紅のように赤い長く垂れた鼻先を目の当たりにするのは、もう少し先、白雪の降り積もる冬の朝のことです。

(文 松吉祐希、イラスト ながたみどり)



写真2 化粧道具の出土状況



写真3 出土した化粧道具の一部
(左から、玉、毛抜き、唐墨)



写真4 出土した銅鏡